

# 地域にとって地域研究者とは何か

——マレーシア・サバ州のバジャウ人研究に見る当事者性と外来者性

## 山本博之

YAMAMOTO Hiroyuki

はじめに

近年、テレビ放送やインターネットの発達・普及により、日常生活を送りながらにして世界各地の様子を見聞きすることがますます容易になっている。現地へのアクセスや史資料の入手・解読の困難さを強調することは、もはや学術的な営みとしての地域研究を「現地通」と區別する手段としての有効性を失いつつある。

地域研究が登場した背景の一つに、伝統的な学問分野の限界に対する認識があった。すなわち、「伝統的な学問分野で積み重ねられてきた学説と方法には特定の時代

と地域に依存したものが少なくなく、これらの学説や方法は多様化する現代世界に必ずしも十分に対応できていない。そのため、既成の学説史と方法論をそのまま適用すると、しばしば対象地域における現実と大きくかけ離れた結論が導かれてしまう」という認識である。この認識を共有する地域研究者は、対象地域社会の現地語を習得し、現地に長期滞在したり現地語資料を読んだりすることでこの限界を乗り越えようと試みてきたが、確立された方法を得るには至っていないようである。このような状況では、既成の学説史と方法論を疑うという地域研究者の態度は既成の学説史と方法論を十分に身につけていないと見られ、地域研究は学問として確立されていない

いという認識を招くことにもなりかねない。

これに対応する方法の一つとして、情報源へのアクセス手段を重視する態度を推し進め、帰属によって情報源へのアクセスを限定するあり方が考えられる。自らの出身コミュニティを研究対象にすれば、そのコミュニティ出身者以外に得にくい情報を手に入れることが可能になる。これは、当事者による発言を促すという意味で、特にマイノリティ研究で一定の成果を上げてきた。ただし、「自分たちのことは自分たちが一番よく知っている」という考え方の延長上で「自分たちのことは他人にはわからない」という立場をとり、情報の入手だけでなくその解釈にも当事者性を主張すれば、他文化研究が不可能になつて地域研究の幅が極端に狭まるだけでなく、そこで行われる研究についても、第三者に議論の妥当性が検証できないという重大な問題を抱えることになる。

このように見れば、地域研究は、「研究対象との距離」と「議論の説得性」という二つの方向性の間で解体の危機にさらされていると言うことができるかもしれない。

その解決策が両者の均衡にあることは明らかであり、問題はその均衡をどのように確保するかということになる。

上記の問題を検討するにあたり、本稿ではマレーシア・サバ州のバジャウ人の事例をもとに考えたい。バジャウ人は、フィリピン、インドネシア、マレーシア(サ

バ州)などの国々にまたがって分布し、特定の国家を祖国としてもたず、しかも陸に定住せずに家船で暮らす人も少なくないことから、しばしばその無国家性が強調されて語られてきた<sup>1)</sup>。ただし、マレーシアのバジャウ人の多くはマレーシア国籍をもち、国民としての権利の主張などを通じて国家の存在が十分に意識されている。

マレーシアでは近年バジャウ人に関する書籍の出版点数が増えている。後述するようにバジャウ人自身が執筆したバジャウ人研究が出版され、また、二〇〇三年にはバジャウ人による初のバジャウ語「マレー語辞書」が刊行された。さらに、二〇〇四年八月にはサバ州立博物館でバジャウ人社会に関する特別展が企画され、それに合わせる形で第四回国際バジャウ／サマ・コミュニティ研究会が開催された。このように、バジャウ人に学問上の関心が集まり、しかもバジャウ人自身がバジャウ人研究に積極的に参入する傾向を見ることができ<sup>2)</sup>る。

むろん、バジャウ人研究はバジャウ人以外のマレーシア人、とりわけマレーシアの優位民族であるマレー人によつても行われている。したがつて、バジャウ人によるバジャウ人研究は、マレー人によるバジャウ人研究との関係において捉えられる必要がある。本稿では、サバにありながら他州出身のマレー人を中心に運営されているサバ大学で、サバ社会とりわけバジャウ人社会の研究が

どのように行われているか、また、それに対してサバのバジャウ人社会がどのように対応しているのかを見ることで前述の課題について考えてみたい。<sup>(3)</sup>

なお、本稿で、バジャウ人研究という特定のコミュニティを対象とした研究を「地域研究」と捉えていることには説明が必要だろう。本稿では、ある個別社会における現実の営みを分析・検討することを通じて、その個別社会を理解するとともに普遍的な価値を見出そうとすることに地域研究の要諦があるとの立場をとる。したがって、本稿でいう地域研究の対象は必ずしも特定の領土や領海によって定義される狭義の「地域」に限られない。その意味で、本稿ではバジャウ人研究を地域研究の枠組において検討することにする。<sup>(4)</sup>

## 一 マレーシアの中のサバとバジャウ人

ボルネオ島の北端に位置するサバは、現在では連邦国家マレーシアを構成する一三州の一つである。サバ州は、同じボルネオ島のサラワク州とともに、マレーシア結成の経緯によって、マラヤ半島部の一一州にない広範な自治権を享受している。かつてイギリスの支配下にあつたマラヤ半島の王国・植民地は、日本占領期後にこの地に

復帰したイギリスによって単一の植民地であるマラヤ連合（後にマラヤ連邦）とされ、一九五七年にマラヤ連邦として独立を迎えた。一九六三年、シンガポールおよびサバ、サラワクがイギリスから独立した際に、三邦はマラヤ連邦と大連邦を形成してマレーシアを結成した（シンガポールは一九六五年にマレーシアから分離独立した）。

この大連邦に参加する条件を交渉する過程で、サバはマレーシアにおける州の自治権を保障する二〇項目の要求をマラヤ側に提出した。「二〇項目の保障規定」と呼ばれたこの要求は、そのままの形で法的根拠を与えられることにはならなかったものの、その主張の多くがマレーシア憲法に取り入れられた。こうして、一九六三年のマレーシア結成に伴い、サバ、サラワク両州では州が広範な自治権を有することになった。サバは独自の出入境管理を行い、マラヤやサラワク出身のマレーシア人がサバで就労する場合、外国人の場合と同様に就労許可を取得することが義務づけられた。マラヤの政党はサバに支部を開設せず、サバの有権者はサバの在地政党を通じてサバ州議会議員および連邦議会のサバ州割り当て議員を選出した。サバ州では州議会における勢力に基づいて州首相が任命され、州首相がサバの内政を管轄した。サバ州与党は連邦レベルでマラヤの与党連合と連合し、連邦与党連合の一翼を担ったが、サバ州与党側はマラヤ一一

州に関する事項にはほとんど干渉せず、また、マラヤの与党連合側も外交・軍事上の問題とならない限りサバの内政に干渉せず、サバの内政をサバの在地政党・政治家に委ねてきた。

住民の民族構成も、サバとマラヤとでは大きく異なっていた。マラヤでは、植民地支配などを通じて住民がマレー人、華人、インド人の三民族からなるという認識が広く共有されるに至っており、この認識に基づいて政治経済を民族別に管轄する諸制度が形成された。マレー人をブミプトラ（原住民）とし、移民系とされる華人やインド人に対してブミプトラを優先するブミプトラ優先政策が導入された。

他方、サバでは民族間の境界に関して広く住民の間に共有された認識がなかった。マレーシア結成の過程で、民族カテゴリーごとに政党を結成して連立するというマラヤ方式を踏襲し、住民をカダザン人、ムスリム／マレー人、華人の三つの民族カテゴリーに分けた。ただし、カダザン人やムスリム／マレー人といった民族カテゴリーは多様な人々を言語や宗教などの標識で外部から括ったものであり、同一の民族カテゴリーに含められた人々の間で同胞意識が共有されているとは限らなかった。また、この三つの民族カテゴリーの間の境界は明確でなく、ムスリムのカダザン人や、カダザン人と華人の通婚など

も広く見られた。

サバはマラヤと異なる「原住民」概念を発展させてきたが、サバがマレーシアの一州となったことにより、カダザン人とムスリム／マレー人はいずれもブミプトラに含められ、ブミプトラ優先政策の対象とされた。ただし、このことは、マラヤのマレー人がバジャウ人などサバのブミプトラを自分たちと対等の存在として見たことを意味していない。

ムスリム／マレー人は、サバの州総人口の約三割を占め、多様な民族集団を含んでいた。バジャウ人はそのほぼ半数を占め、サバのムスリム住民のなかでは最大多数派を構成していた。これに対し、マラヤの優位民族であるマレー人はサバでは少数派であるが、マラヤとサバを含む「マレー世界」の枠組においては、マレー人はより「文明化」された人々であるとの自負があった。マレー人は、バジャウ人などサバのムスリム住民に対して「正しい」イスラム教および「正しい」マレー語を身につけさせることを通じて「マレー人にする」、すなわち「文明化する」ことをマレー人の責務と見なす心性があった。このような認識のもと、かつてバジャウ人は公の場でバジャウ人と名乗ろうとしなかった。しかし、マレーシア結成の過程でサバという枠組に意味が与えられ、それとともにバジャウ人という枠組にも積極的な意味が与えら

れ、現在のサバではバジャウ人が政界にも多く進出し、歴代の州首相や州元首を出してきた。現在、サバではバジャウ人という呼称が自称・他称ともに広く用いられている。

## 二 サバ大学の設置

サバ大学は、一九九四年一月、マレーシアで九校目の国立大学としてサバ州に設置された。それまでサバにはマラヤに拠点を置く国民大学（UKM）のサバ校があったが、サバ州に拠点を置く大学としては初めてのものとなった。<sup>6)</sup>

サバ大学の設置は、連邦政府が選挙対策の一つとして唐突に発表したものであり、政治的な意図を疑わせるものであった。一九八五年にサバ州政権を握ったサバ団結党（PBS）は、「サバ人のサバ」を掲げてマレーシアにおけるサバ州の自立を唱え、マラヤの与党連合で連邦政府の中核でもある国民戦線（BN）との関係を悪化させた。サバ団結党が一九九〇年に国民戦線を脱退すると、サバ州政府と連邦政府との対立は決定的となった。このような状況で、一九九二年には「二〇項目の保障規定」の見直しが広く議論された。国民戦線側は「二〇項目の

保障規定」の廃止を唱え、サバの自治権の縮小を主張した。これに対してサバ団結党側は、石油ロイヤルティの州取り分の五%から三〇%への引き上げに加え、サバの地元テレビ局の開設や大学の設置などを訴えたが、連邦政府はこれらの要求をいずれも拒絶した。<sup>7)</sup>

サバ州政権の奪回を目指した国民戦線は、マラヤの政党をサバに進出させないという慣行を破り、サバの直接統治に乗り出した。一九九一年、国民戦線の中核政党である統一マレー人国民機構（UMNO）がサバに支部を結成し、ほかの国民戦線構成政党もこれに続いた。これらの政党はサバの地元政党と連合してサバ州国民戦線を結成し、サバ州政権の奪回を掲げて一九九四年の州総選挙に臨んだ。一九九四年一月、国民戦線総裁でもあるマハティール首相が選挙運動のためにサバを訪れ、この選挙で国民戦線が勝利したらサバに大学を設置すると公約した。選挙の結果は民選の四八議席中二五議席を獲得したサバ団結党が辛勝したが、選挙直後にサバ団結党から国民戦線に議員の移籍が相次ぎ、サバ団結党政権は倒壊し、国民戦線がサバ州政権を掌握した。国民戦線は「選挙で勝利した」わけではなかったが、一九九四年一月、連邦政府は公約通りにサバに大学を設置し、マレーシア・サバ大学（UMS）と名づけた。<sup>8)</sup>

サバ団結党が大学設置を求めたときには認めず、選挙

での国民戦線への投票と引き換えに大学を与えるとする連邦政府の態度に対し、サバ大学の設置は政治目的によるものであるとの批判が出た。これに対し、一九九九年の州総選挙の際にサバを訪れたナジブ・ラザク教育相は、サバ大学の略号であるUMSを「Utukmu, Sabah」（サバよ、君のために）とする読み替えを披露し、国民戦線は一九九四年以来サバのために開発政策を進めており、サバ大学の設置はその一つであること（そしてそれを担当したのが教育相であるナジブ自身であること）をアピールし、サバ大学は国民戦線への支持と引き換えに連邦政府がサバに与えたものであるとの認識を隠そうともしなかった。

サバ大学の設置目的は、少なくとも公式には、サバの人々に高等教育の機会を与えるためであると説明された。もともと、サバの学生に高等教育の機会を与えるという目的は、少なくとも短期的には目立った成果を挙げなかったようである。一九九五年七月に入学した初年度の学生二〇五名のうち、サバ出身の学生はわずか四割であった。これは、サバでは大学に入学するための全国統一試験の合格者が少ないことが原因であったが、サバ大学はサバの学生に門戸を開いていない、したがってサバに大学を設立した意味がないとの批判を招くことになった。その上、マレーシアは一九九七年の経済・金融危機によ

って海外留学が困難になった学生を国内の各大学に受け入れる政策をとったため、その後サバ大学は一九九六年度に四二四名、一九九七年度に七一二名、一九九八年度に一三七三名と入学学生数を毎年倍々に増加させ、一九九九年一月の時点で学部学生の総数は二七四名となった。この状況でサバ出身者を四割確保することは難しく、実際にはサバ出身者は学生数の二割に満たない状況となっていた。

### 三 サバ大学におけるサバ研究

短期的に見た場合、サバ大学の設置は、教育上の意義よりも研究上の意義の方が大きかったように思われる。熱帯雨林研究や海洋研究などの自然科学の分野でサバに大学を置くことの優位性を活用した研究拠点を形成したことに加え、人文社会科学の分野でもサバ社会をどのように把握するかという研究が促進された。しかも、サバ社会の研究はマレーシアの国政レベルでの政策立案上の要請を受けてのものであった。すなわち、サバには多数の民族があり、サバ内部で民族間の対立と協力が繰り返され、サバ州政治の不安定を招いており、また、それらの民族の中にはマラヤに対して批判的な思想を抱くもの

が存在し、マレーシア内におけるマラヤとサバの関係が不安定である、と認識された統治上の問題への対応である。このことは、サバ大学設置にあたってのマハティール首相の以下の言葉によく表れている。

ここサバで実践されているエスニック集団 (ethnic) 間の統合過程は極めて個性的なものであり、それに関する研究は、単一のマレーシア民族 (Bangsa Malaysia) を建設する営みにおいて政府を助けうるものである。マレーシア民族とは、共通の歴史経験を持ち、ともに分かち合う価値観を持ち、我々意識および同一の心性を共有しているという意識をもち、自らの民族 (suku kaum) アイデンティティを強く訴えることなしにエスニック集団間の結合を可能にするものである (Daily Express 1995.11.28: 23)。

これを受けて、サバ大学の文系学部・センター、とりわけ社会科学部と教養・言語センターは、学生に対する教育に加え、サバ社会をどのように捉えるかを研究するという政策上の課題の一翼を担われた<sup>10)</sup>。しかしながら、設置当初の数年間、サバ大学はサバ研究の成果を十分に挙げられなかった。

この背景には、第一に、急ごしらえの大学だったために教育・研究スタッフに十分な研究経験を有する人材が少なかったことがある。サバ大学の各学部は、学部長一名および副学部長一〜三名を含め、二〇〜四〇名の教育・研究スタッフを擁していた。学部長はいずれの学部でも欧米の大学で博士号を取得したマラヤ出身のマレー人で、マラヤ大学や国民大学などマラヤの国立大学で長く勤めた経験を持ち、サバ大学設置に伴ってマラヤからサバに移籍した人々である。副学部長は、欧米で博士号または修士号を取得済みのマラヤ出身の研究者であり、多くはマレー人である。教授、助教授、講師、補助講師 (教養・言語センターの場合はさらに語学教師) のうち教授と助教授は博士号保持者に限られており、科学技術学部と情報技術学部を例外として、どの学部でも教授・助教授職は正副学部長に限られていた。講師のほとんどはマレーシア国内外の大学で学士あるいは修士号を取得した若手の研究者であり、出身州や民族性を問わずに採用されていた。その多くは大学を卒業して間がなく、サバ研究の成果をただちに出すほど十分な研究経験をもっていないかった。

第二に、マラヤ出身の教育・研究スタッフの間にサバ社会に対する十分な知識がなく、それに基づいてサバ社会に対する警戒心が存在していたことがあるように思わ

れる。これは、一九八五年の総選挙でサバ団結党が勝利を収めて州政権を手にした際にコタキナバル市内で爆弾事件が相次ぎ、サバでは総選挙のときに爆弾事件が起きるとのイメージがマラヤの新聞・テレビなどで報道されていたことによる。さらに、その後のサバ団結党政権は「サバ人のサバ」を掲げてマラヤに対するサバの自立を主張し、一九九九年州議会選挙はサバ団結党と国民戦線の一騎打ちと見られていたことから、必要以上にサバの政局に対する不安が煽られていたこともあっただろう。<sup>(13)</sup>

一九九九年の州総選挙の結果を検討しようとしてサバ大学の社会科学部や経済経営学部出身の若手講師が学内で研究会を開催しようとしたとき、大学当局が研究会の開催を許可しないというできごともあった。<sup>(14)</sup>

単なる知識の欠如に基づく警戒心とは別の要因もあった。マラヤ出身者、とりわけマレー人の中で、サバは文化的にマラヤよりも劣っており、そこから学ぶべきものはないという考えが支配的であったことも否定できない。一九九九年に行われたサバ大学の第一回卒業式では、サバの在地文化と何の関係もないと批判と抗議を受けたにもかかわらず、教養・言語センター長の発案によってミナンカバウ式の儀礼が取り入れられた。

この状況は、一九九九年の総選挙でナジブ教育相が国民戦線の陣頭指揮のためにサバ入りし、サバ大学に挺入

れたことを契機に変化を見せた。教養・言語センターでは、教育・研究スタッフが学内の研究会で研究発表を行うことが義務づけられ、サバ出身の講師や補助講師がフィールド調査の結果を研究発表し、それをまとめた報告書が刊行されるようになった。<sup>(15)</sup>

サバ社会に関する調査で一歩先行していた社会科学部は、一九九九年八月の第一回卒業式に合わせてサバに関する研究成果を出版した。<sup>(16)</sup>

さらに社会科学部では、サバのムスリムの社会運動史を専門とする歴史学者のサビハ・オスマンを国民大学から、また、移民研究で知られる社会人類学者のアジザ・カシムをマラヤ大学からそれぞれ教授として迎えた。アジザが招かれた背景には、サバでインドネシア人とフィリピン人の不法滞在者の存在が深刻な社会問題と見なされていたことがあった。サビハとアジザは、それぞれサバ大学の若手講師グループを組織して文書館調査やフィールド調査を行い、その成果を、国際アジア歴史家会議 (IAHA 2000)、ボルネオ調査会議 (BRC 2000)、国際バジャウ/サマ・コミュニティ研究会議 (ICBC 2004) などサバ大学を会場とする国際会議やその他の学内外の研究会で発表してきた。

サビハとアジザの間には、それぞれの専門性から、サバ社会のうちカダザン人やバジャウ人などの国籍保有者



についてはサビハ、インドネシア人やフィリピン人など外国人についてはアジザという研究上の分担が成立していた。その上で、サビハとアジザの研究プロジェクトの接点の一つとなったのがバジャウ人の社会経済的状況に関する調査であった。

バジャウ人が国境を越えて分布していることから、フィリピン人移民はバジャウ人を多く含んでおり、サバに入境するとマレーシア国籍をもつ親戚のもとに身を寄せるフィリピン人移民も少なくなかった。そのため、サバのバジャウ人の生活水準を調査することは、移民研究においても重要な意味をもつと考えられたためであった。

この研究プロジェクトは、マラヤ出身のマレー人研究者がサバのバジャウ人の社会経済的地位の向上に寄与する基礎的研究を行い、それをもとに政府に必要な提言を行うという形をとっている。この研究プロジェクトにおいて、マレー人研究者はバジャウ人を自分たちと同じブミプトラであると呼ぶ。しかし、「同じブミプトラ」と呼ぶことで、マレー人研究者がバジャウ人を自分たちと対等の存在であると認めたかどうかは疑わしい。マラヤでマレー人の経済水準が上がり、ブミプトラ優先政策の継続に対する疑問の声が出ていることとあわせて考えるならば、ブミプトラ優先政策を継続する理由としてサバのブミプトラが、とりわけムスリムであるバジャウ人が、

マラヤ出身のマレー人研究者によって「貧しいブミプトラ」として「発見」されたともできる。では、マレー人研究者によって「同じブミプトラ」という眼差しが向けられた対象であるバジャウ人は、マレー人をどのように見たのか。

#### 四 バジャウ人によるバジャウ人研究

本稿の冒頭でも触れたように、マレーシアではバジャウ人に関する研究書が何点か刊行されている。それらのうち主なものとして、グスニ・サアット著の『都市部におけるサマ／バジャウ人社会』（国民大学、二〇〇三年）がある。グスニ・サアットはバジャウ人に関するサバ出身の研究者として知られている。『都市部におけるサマ／バジャウ人社会』は修士論文をもとにまとめたものであるが、そのもとなつたいくつかの論考はマレーシア国内のジャーナルなどで発表されており、サバ社会に関する研究会などでしばしば参照される標準的な研究となつている。その意味で、グスニ・サアットの研究は、マレー人研究者と連携してブミプトラ政策を支える方向でマレーシアの政策立案に寄与してきたということができる。

ただし、グスニ・サアットの主張は、『都市部におけるサマ／バジャウ人社』の翌年に発表された『サパンガール湾の原住民』（国民大学、二〇〇四年）で大きく方向が変えられた。同書は、その一角にサバ大学が位置するサパンガール湾を舞台に、住民の社会経済状況を描いたものである。サパンガール湾にある州議会の選挙区であるカランブナイ区は、その多くがバジャウ人集住地区であり、伝統的にバジャウ人候補の当選に寄与してきた。しかし、二〇〇四年の州総選挙で国民戦線は、地元出身のバジャウ人ではなく他地区出身の非バジャウ人であるジャイナブ・アフマドをカランブナイ区の公認候補とした。選挙ではジャイナブが辛勝したものの、投票所ごとの得票を見ると、バジャウ人集住地区ではいずれもジャイナブの得票が対立候補の得票を下回っており、ジャイナブを当選させたのは少数の非バジャウ人集住地区での大量得票であった。このことからグスニ・サアットは、カランブナイ区のパジャウ人はジャイナブを支持していないと結論づけた。さらに、州内のはかのバジャウ人集住選挙区でも、地元出身のパジャウ人が国民戦線の公認を得られなかったために国民戦線候補の得票数が前回総選挙の国民戦線候補者の得票数より減ったとして、国民戦線に対するバジャウ人の支持は失われつつあると結論づけ、バジャウ人集住選挙区で非バジャウ人を公認

候補とした国民戦線の中央執行部を間接的に批判した。

連邦政府およびマラヤのマレー人に対する批判は書名にも見て取ることができる。書名では、「原住民」を意味する二つの語のうち、マレーシアで一般的に使われている「プミプトラ」ではなく「プリプミ」が使われている。ここには、連邦政府のプミプトラ政策の対象であつて常に連邦政府の管理と保護の対象である存在としての「プミプトラ」ではなく、サパンガール湾に実際に住んでいる「プリプミ」として自分たちを位置づけ、それにふさわしい扱いを求めているとの主張を読み取ることができる。プミプトラ政策は真の意味で「原住民」に対する優先政策ではなく、実際にはマラヤのマレー人優先政策であることに對する批判が込められていると言えるだろう。

この主張をサバの人々はどうのように受け止めたのか。『サパンガール湾の原住民』は、修士論文をもとにした前著『都市部におけるサマ／バジャウ人社』と異なり、学術論文の体裁をとっていない。前半部分にこそサパンガール湾に関する社会経済的なデータが掲載されているものの、後半部分は前述の通りの内容であり、この叙述の形式はサバにおける「政治読み物」と同じものである。サバでは、五年に一度の総選挙の時期が近づくと、政治家たちが自陣営の宣伝や相手陣営の批判のために書き

た小冊子が町の書店や新聞スタンドに並ぶようになる。

それらには、事実と主張を明確に区別せず、論拠も明示しないで議論を展開しているものも少なくない。選挙にあたっての各陣営の主張を知る上では参考になるが、客観的な事実を知る上では内容の慎重な検証が欠かせない。

サバでは、政府が設置する調査委員会や国立大学によって発表されたものが「公」の文書と見なされるのに対して、これらの「政治読み物」は、たとえ政治家による内部情報が満載されていたとしても、特定の政治勢力によって政治目的をもって書かれた「私」の文書であって、公の場で取り上げるに値しないと見なされている。ここで「公の場」というのは、特定の民族だけでなくサバの各民族が集まる場という意味で使われている。バジャウ人の一員としてバジャウ人の政治意識を説明するのであれば、第三者にはその妥当性が検証できないことになる。

サバにおけるバジャウ人の文化団体であるサバ・バジャウ人文芸協会は、『サパンガール湾の原住民』を大きく取り上げ、二〇〇四年八月にはコタキナバルで同書の出版記念会を開催した。国民戦線の中央執行部が同書の批判を受け入れてサバのバジャウ人社会に何らかの対応を検討することになれば、同書の出版は政治的に一定の目的を果たしたことになるのだろう。しかしながら、学術的な影響という点では、同書は『都市部におけるサ

マ／バジャウ人社会』と同じ扱いを受けていない。サバ大学の教員やサバ開発問題研究所（IDS）の研究員によれば、『都市部におけるサマ／バジャウ人社会』はバジャウ人について調査を行う上で参照すべき基本書の一つであるが、『サパンガール湾の原住民』は「政治読み物」であって、調査研究を行う上では有益でないと判断している<sup>(18)</sup>という。

### むすびにかえて

本稿では、サバにおけるバジャウ人研究を題材に、研究者が自身を対象社会の一員と見る事例をいくつか見してきた。アジザなどサバ大学のマレー人研究者も、グスニ・サアットのようなバジャウ人研究者も、いずれもサバのバジャウ人社会の発展に寄与することを目指す点では共通している。ただし、マレー人とバジャウ人と同じブミプトラの一員同士とする見方は、マレー人とバジャウ人の間で必ずしも共有されていない。

ここでは、「社会との切り結び」という要素を加えることで「研究対象との距離」と「議論の説得性」との結び付き方を検討したい。

地域の固有性を尊重することは、地域研究の基本的な

立場の一つである。ただし、地域研究が自らを学問の一端に位置づける限り、固有性の析出で留まることは許されず、何らかの形で普遍的な価値を見出す努力が必要になる。このように、地域研究の成果が普遍的な価値をもつたものであるとするならば、その成果はすべての人に等しく開かれており、地域研究者は誰に対して成果を公表してもかまわないということになる。このように考えれば、研究成果を社会に還元する上で有効な方法として、政策立案と密接に結び付くという選択も当然あり得るだろう。しかしながら、この立場をとる場合には、「研究対象との距離」を適正に保つため、普遍的な価値とされるものが権力関係のなかに置かれたときにどのような働き方をするかを慎重に検討することが必要になる。

これと逆に、「知」は帰属先の違いが重要な意味をもつと考えれば、地域研究者は研究成果を誰に公表するかを選択しなければならぬことになる。その結果、政策立案に直接携わる指導的エリートではなく、民衆レベルに成果を還元するという選択も生じうる。現地の人々とともに、あるいは現地の人々を代表して社会活動を行うという考え方は、この延長上に位置づけられる。ここで問われるのが、地域研究者は自らを対象地域の一人として位置づけることができるのかという問いであろう。

地域研究者が対象地域の抱える問題を自らの問題とし

て共有し、自身の専門性をもって対象地域に何らかの貢献をしたいと考えるのは自然な感情である。この感情は、地域研究が学問として発展していく上で積極的に認められるべきものであると考える。しかしながら、研究者が自身を対象地域の社会の一員であると思わず、対象地域のすぐ隣にある地域に目を向けることがなければ、その研究成果は対象地域の内部で受け入れられたとしても、対象地域の外部にある社会からは受け入れられない可能性がある。

「地域」とは、「全体」から何らかの方法で切り取られた「部分」である。研究の手法としてはある「地域」を区切って研究対象とするが、現実にはそのすぐ隣に別の「地域」が存在している。地域研究者が研究成果をもつて社会に何らかの働きかけを行い、一定の影響力を行使したいとすれば、直接の研究対象地域だけでなく、研究主題において関連する複数の当事者地域に対しても説得的な議論を展開することが必要となる。ここにおいて、当事者性の主張は議論の説得性を増すことに寄与しない。研究者が対象地域にとつて外来者であることを恐れず、常に外来者性を自覚しながら対象地域と関わりとうとする努力の先に、社会と切り結ぶ学問としての地域研究の可能性が切り拓かれていくことだろう。

註

(1) バジャウ人と呼ばれる人々のなかにはバジャウ人と自称しない人々もいるが、本稿では、マレーシア・サバ州以外に住む人々を含めて「バジャウ人」と呼ぶ。

(2) バジャウ人研究では、バジャウ人社会をどのように捉えるかについて多くの論考が発表されている。それらには、マレーシアという国家の枠組でマラーヤのマレー人の権威のもとに再編されたとする見方(長津 2004)や、バジャウ人が国境や国家を逆手にとつて越境しているとする見方(床呂 1996、1999)などがある。

(3) サバ大学に関するデータのうち本稿で特に典拠が示されていないものは、筆者が一九九八年四月から二〇〇〇年三月までサバ大学の教養・言語センター講師として勤務していた際に見聞きしたことに基づく。

(4) 地域研究論においては、「文系・理系の融合」「フィールド調査」「地域間比較」がしばしば強調される。本稿では、それらが地域研究をより豊かにする上で重要であることを否定するつもりはまったくなく、それらが地域研究に不可欠であるとの立場を取らない。

(5) 一九五〇年代のサバにおけるバジャウ人アイデンティティの形成について、詳しくは(山本 2002)を参照。

(6) 国民大学サバ校は、一九七四年にキナルト地区で開校し、数年後にトゥアラン地区に移転した。サバ大学の設置に伴い、国民大学サバ校は一九九六年に閉鎖され、国民大学の本キャンパスに統合された。サバ大学はトゥアラン地区にある国民大学サバ校の設備を利用した後、一九九九年

にコタキナバル市内のサパンガール湾(リカス湾)に建設された本キャンパスに大学機能を順次移転し、現在では一部の研究施設を除いてリカス地区がサバ大学の活動拠点となっている。

(7) 一九九二年の「二〇項目の保障規定」をめぐる論争については(山本 1996)を参照。

(8) 一九九四年総選挙とマハティール首相の公約については(山本 1996)も参照されたい。

(9) 一九九一年にマハティール首相が打ち出したマレーシアの中長期的な国家目標の一つ。マレー語の「バンサ」がエスニック集団とネイションのいずれも指しうるため、マレー人、華人、インド人など多様な民族からなることされるマレーシアにおいて、優位集団であるマレー人への他民族の文化的な同化を意味するのか、それとも文化的多様性を維持したまま国民的認識を共有するという意味でのマレーシア国民意識の創生に近いのかなど、明確な結論が出されないまま現在に至っている。

(10) 一九九九年に行われた教養・言語センターの教授会でのセンター長の発言による。

(11) 一九九九年の時点で、サバ大学にはリカス校に社会科学部、経済商業学部、心理・社会事業部、言語・教養センターが、トゥアラン校に科学技術部、食品化学部、情報テクノロジー学部、国際熱帯森林学部、社会開発・教育学部、メディア・教育技術ユニット、芸術研究センターが置かれていた。本稿では、これらの学部とセンターを「学部」と総称する。

(12) 一九九九年の時点で、科学技術学部には正副学部長のほかには教授四名と助教授一名が置かれ、情報技術学部には

は正副学部長のほかにも教授二名と助教授五名が置かれていた。

(13) 一九九九年の総選挙の選挙運動期間中に筆者が参加する機会を得た国民戦線支持者による集会では、リカス区で国民戦線の公認候補となったヨン・テックリーが、一九八五年の総選挙直後の爆弾事件のニュース映像を繰り返し上映し、治安維持のために与党である国民戦線に投票するようにと聴衆に呼びかけていた。

(14) 例えば、一九九九年のサバ州議会選挙では、マラヤ出身の教授・助教授の多くは爆弾事件の再発を恐れてマラヤに帰省し、若手講師たちは門扉を鉄格子で守られた家に集まり、選挙期間中はそこからほとんど出ずに過ごしたという。

(15) 教養・言語センターの研究会の成果をまとめた研究書のうちサバ社会を扱ったものに以下のものがある。

Gidah, Mary Ellen (2001) *Archetypes in the Cosmogenic Myths of the Australian Aboriginal People and the Kadazanians of Sabah*, Universiti Malaysia Sabah. Low Kok On (2001) *Citra Wina Rakyat dalam Legenda Mat Salleh*, Universiti Malaysia Sabah. Stephen, Jeannet (2001) *Code-Switching as a Discourse Mode: A Study of a Kadazanusun Family*, Universiti Malaysia Sabah. Wong Kon Ling (2000) *The Sabah Malay Dialect: Phonological Structures and Social Functions*, Universiti Malaysia Sabah.

(16) 第一回卒業式の式場で販売された社会科学部発行の研究書には以下のものがある。Abdul Maulud Yusof, et al. (eds.) (1999) *A Regional Conference on "Academic*

*Co-Operation in BIM-EAGA: Prospects and Challenges*", Universiti Malaysia Sabah. Rosnah Ismail & Abdul Halim Ohman (1999) *Khalit Keluarga Kadazanusun: Satu Wawancara Kumpulan Bertekun*, Universiti Malaysia Sabah. Schulze, Heiko & Surtani Suratman (1999) *Villagers in Transition: Case Studies from Sabah*, Universiti Malaysia Sabah.

(17) ここで取り上げたもののほかには、ヤップ・ペンリアン著の『サバ州コタ・ブルにおけるバジャウ社会の政治と経済』(マラヤ大学、二〇〇一年)などがある。

(18) 二〇〇四年八月、サバ大学およびサバ開発問題研究所での聞き取りによる。

#### 参考文献

上田達(2002)「バジャウ・ラウトに関する人類学的研究の課題と展望」『人間科学』二三(二)号、七五-九三頁。

床呂郁哉(1992)「海のエスノヒストリー——スルー諸島における歴史とエスニシティ」『民族学研究』五七(二)号、一〇二頁。

——(1996)「越境の民族誌——スルー海域世界から」『岩波講座文化人類学七「移動の民族誌」岩波書店、一五九-一八六頁。

——(1999)「越境——スルー海域世界から」岩波書店。

富沢寿勇(1997)「東南アジア海域世界の国家と海洋民」塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所、二二七-二六二頁。

長津一史(2001)「海と国境——移動を生きるサマ人の世界」尾本恵

市ほか編『島とひとのダイナミズム』岩波書店、一七三-二〇二頁。

——(2003)「周辺イスラームにおける知の枠組み——マレーシア・サバ州」海サマ人の事例(一九五〇-七〇年代)』上智アジア

学』二〇号、一七三—一九六頁。

—— (2004) 「正しい」宗教をめぐるポリテイクス——マレーシア・サバ州、海サマラ社会における公的イスラームの経験」『文化人類学』六九(一)号、四五—六九頁。

野口武徳(1984)「陸に上がる東南アジアの漂流民」家島彦一・渡辺金一編『イスラム世界の人びとと海上民』東洋経済新報社、三五—七六頁。

村井吉敏(1998)『サシとアジアと海世界——環境を守る知恵とミス・テム』ロコニス。

門田修(1986)『フィリピン漂流民——月とナマコと珊瑚礁』河出書房新社。

—— (1990) 『海賊のころ——スールー海賊訪問記』筑摩書房。

山影進(1986)『地域にとって地域研究者とは何か——地域設定の方法論をめぐる覚書』日本政治学会編『第三世界の政治発展』岩波書店、一二—五頁。

山本博之(1996)「『二〇項目』問題と連邦・州関係——一九五〇年代カダサン民族主義の復活とその限界」原不二夫ほか編『国民開発政策(NDP)下のマレーシア』アジア経済研究所、一三—一四九頁。

—— (1999) 「マレーシア・サバ州の州首相輪番制の導入を問われるもの」『アジア研ワールド・トレンド』アジア経済研究所、四二—八二—八八頁。

—— (2000) 「される側から見た「越境」『通信』九九号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二—一二三頁。

—— (2002) 「英領北ボルネオ(サバ)におけるマシヤウ人アイデンティティの形成」『東南アジア歴史と文化』三二号、五七—八〇頁。

Drütke, Milida. (2002) *Die Gabe der Seemonnen. Bei den Wassermenschen in Südostasien*. Hoffmann & Campe. (村上司訳 [2003] 『海の漂着民族マシヤウ』草思社)。

Gusni Saat (2003) *Komuniti Semah-Bajau di Bandar*, Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

—— (2004) *Pertumbuhan Teluk Sabonggar*, Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

Renena Obon (1999) *The Sama Horsemen*, Kota Kinabalu: Persatuan Seni Budaya Bajau, Sabah.

Mohammad Raduan bin Mohd. Arif (1995?) *Dari Penemuan Teybang ke Penemuan Ulang: Sejarah Perkembangan Persebaran Perikanan di Borneo Utara, 1750-1990*, Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaysia.

Mohammad Said Hinayat (penyusun) (2004) *Glosori Bahasa Bajau/Sama-Bahasa Melayu*, Kota Kinabalu: Persatuan Seni Budaya Bajau, Sabah.

Nagatsu Kazufumi (2001) "Prates, Sea Nomads or Protector of Islam?: A Note on 'Bajau' Identifications in the Malaysian Context" 『マシマ・マフリカ地域研究』一冊、京都大学大学院マシマ・マフリカ地域研究学際、二二—三〇頁。

Ninmo, Harry Arlo. (1972) *The Sea People of Sulu: A Study of Social Change in the Philippines*, Chandler Publishing Co.

—— (1994) *The Songs of Salenda and Other Stories of Sulu*, Seattle: University of Washington Press. (西重人訳 [2001] 『漂着民マシヤウの物語——人類学者が暮らしたフィリピン・スールー諸島』現代書館)。

Saidatul Normis Haii Mahali (1999) *Bahasa dan Alam Pemikiran Masyarakat Bajau*, Kota Kinabalu: Universiti Malaysia Sabah.

Sather, C. (1997) *The Bajau Lant: Adaptation, History, and Fate in a Maritime Fishing Society of Southeastern Sabah*, Oxford University Press.

Warren, J.F. (1971) *The North Borneo Chartered Company's Administration of the Bajau, 1878-1909: The Pacification of*

*a Maritime, Nomadic People*, Ohio University.  
Yap Beng Liang (2001) *Politik dan Ekonomi Masyarakat Bajau  
Kota Belud, Sabah*, Kuala Lumpur: Akademi Pengajian Melayu,  
Universiti Malaya.

(やまもとひろゆき／地域研究企画交流センター)